

白根山麓・山棲み集落の考古学的調査

能登 健

1 熊倉遺跡発掘調査の前提

群馬県下では、火山灰層下から多くの水田や畠の遺構が検出されている。そしてこれらの遺構の発見は単に農業技術の発達過程を解明する具体的な資料の提示だけではなく、新しい集落論の展開をも促している。すなわち、考古学を通じて、全体史を構成し得る位置へ導く重要な足がかりともなりうるのである^{*}。

従来の集落論は、住居址の配置や出土遺物から個別集落を摘出し、各集落の性格分析や集落相互の比較検討を行なうことにより、集落形態の一般的法則性を導き出そうとしている。この場合の「集落」は、少数例を除いて、発掘調査によって把握し得た住居址群を対象としている。言いかえると、居住域の集落論として規制されざるを得ない状況下にあった。

居住域の遺構に加えて、田・畠という直接的な生産域が確実に把握され、その存在形態と発展のプロセスが解明されるに従って、集落の景観は全体化され、分析の対象も飛躍的に拡大することになる。人間が自然を改変しながら、新しい空間を組織化してきたプロセスが、新たな時間軸をもって問いなおされるに至ったのである。

群馬県の平野部は、洪積台地、扇状地、山麓末端に加えて、様々な成因の沖積地が混在する。この複雑な地形の中に点在する農耕集落の遺跡は、一見ランダムな立地をとるように見える。しかし、詳細に分析を加えると、各遺跡はそれぞれの時期に応じた水田可耕地に臨んで立地することがわかる。水田の有する高度に政治的な性格によって、農耕集落の存在形態が規制されるようすもしだいに判明しつつある。

このような状況の下で熊倉遺跡を分析すると、平野部の集落の立地パターンには

あてはまらないことがわかる。遺跡周辺には、水田耕作の可能な土地は全くない。

熊倉遺跡の成立は9世紀後半であり、水田農耕を経済基盤にした律令体制下の集落である。この点で、熊倉遺跡は、政治的にはもちろん、経済的、社会的にも平野部で展開する集落の動向とは異なる歴史的過程のもとに成立した可能性が出てくる。すなわち、平野部に展開する、水田耕作に中心をおく農耕集落を「里棲み集落」として捉えた場合

*能登健「群馬県における埋没田畠調査の現状と課題」『群馬県史研究』17, 1983, 2

白砂川沿いに小雨の集落を望む
熊倉遺跡は後方の山の向こう側になる。



熊倉遺跡をはじめとする山間部集落のうち、水田に基盤をおかない農耕集落を「山棲み集落」として対置すべき内容がここにある。

今回の熊倉遺跡の発掘調査では、このような視点にもとづいた、山間部における農耕集落の成立とその展開を究明することが大きな目的の一つでもあった。

2 里棲み集落の発展プロセス

稲作農耕の開始によって成立した農耕社会は、水田耕作の適地のひろがる平野部を中心に展開した。そして、開発の進展に伴って、その範囲は外縁部、すなわち平野部に接する山麓や丘陵の谷あいへと拡大してゆく。ここでは、これら平野部に展開する里棲み集落の発展プロセスについて概観する。

伝統集落 群馬県下における稲作農耕の開始期については、未だ明確になっていない。しかし、弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて、県内西部一帯に分布する樽式土器や、県東部を中心として古墳時代前期に出現する石田川式土器を使用した集落が水田耕作を行っていたことは、発掘調査によって確実にされている。現在、水田そのものが確認されている4世紀中葉には、大規模な水田耕作が展開されている。この時期の水田は、中小河川の流域にかかる沖積地が選定されており、より少ない労力によって、より効率的な農作業が行なわれている。用水の確保は、河川から容易に取水が可能で、しかも水管理が自在な最良の水田である。このような良好な水田は、その後も継続的に耕作が行なわれ、居住域では、弥生・古墳時代前半から、奈良・平安時代に至るまでの複合遺跡をなしていることが多い。農耕社会におけるこのような継続的な住居を有する遺跡は、伝統的な集落としてとらえられる。

第一次新開集落 5世紀末から6世紀代にかけて生活体系に大きな変化が現われる。住居ではカマドが付設され、居住域は拡大・拡散がくりかえされる。これらの変化は水田耕作地の拡大に一致すると考えられる。伝統集落では、居住域が継続しつつ拡大するが、このほかに、伝統集落周辺にも新しい集落が発生している。この新しい集落は、河川のない谷に面している場合が多く、想定される耕地は欠水性沖積地にあたる。この欠水性の沖積地は、かつて何らかの要因をもって沖積化されたところではあるが、当時の現状では河川あるいは湧水などが無く、伝統集落の形成時には無視されていた地点であった。しかし、用水の確保さえなされれば良好な水田地帯になるところでもあった。ここへの進出は、農耕用の溜井を掘ることによって可能となる^{**}。溜井灌漑の出現が、新開地への進出を可能にした。この第一次新開集落の成立期は、耕地の急激な増加が促されるとともに、群集墳と呼ばれる新しい墓域が発生した時期でもあった。

第二次新開集落 6～7世紀を通じて、水田耕作の適地は、ことごとく開田されていた。しかし、執拗な開田政策は続行されることになる。残された可耕地は平野部の過水地帯や開析谷支谷の冷水地帯のみであり、この部分が対象となる。水田耕作技術のうち最も大切なものは、稲の生育に伴う水管理であり、冷水・過水地帯の水管理は、技術的に最も難しいものであった。8～9世紀以降は、平野部で最後まで残された湿地や、谷地内の腐植未分解の土壌を有する冷水・過水地帯にも、収穫量の少ない湿田が開かれる。このような段階に成立した集落は第二次新開集落として分類することができる。

* 能登健・小島敦子「弥生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会、1984、3

** 能登健・石坂茂・小島敦子・徳江秀夫「赤城山南麓における遺跡群研究」『信濃』35—4、1983、4

*井上唯雄『井堀遺跡』草
津町教育委員会 1974. 3

3 白根山麓の遺跡分布

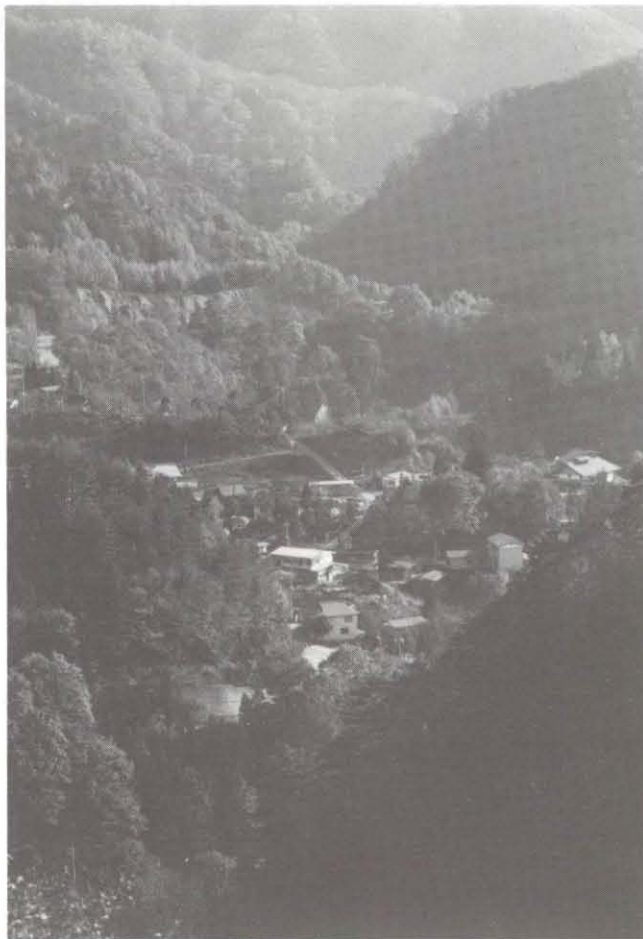
平野部における集落の発展プロセスは大きく三段階に区分される。そしてそれぞれの集落は、その多くが基本的な生産基盤としての農耕を水田耕作地に求めている。このような状況に対して、熊倉遺跡は水田可耕地が全くない奥山に立地している点で特異である。

白根山麓一帯は、火山山麓であるとともに、高冷地であるために、現在でも未開発な地が多く、そのために遺跡の発見も少ない。発見されている遺跡の多くは戦後の入植による開墾時に発見されたものが多い。現在までに、白根山麓およびその周辺では、30か所の遺跡が確認されており、その内訳は、縄文時代（前・中・後期）17か所、平安時代（広義の国分式期）13か所である。弥生・古墳時代の集落および古墳は未発見である。

平安時代の集落は、その多くが標高1000m以上のところに分布している。立地傾向は、山麓末端にひらけた比較的平坦な部分に集中しており、熊倉遺跡はその典型といえよう。谷底での遺跡は1か所のみである。いずれも居住域の近くには、生活用水の確保が可能な小河川や湧水がある。しかし、すべての地が層厚のある黒ボク土に覆われた地域で、地形的にも水田可耕地はない。発掘された平安期の遺跡は、熊倉遺跡のほかに、草津町井堀遺跡がある^{*}。井堀遺跡は、住居址1軒のみの調査であるが、その形態は熊倉遺跡の住居址に近似しており、出土遺物による年代観も、9世紀中葉ではほぼ一致する。

谷底に立地する花敷の集落

花敷は川底から温泉が湧出しており、それをとりまくように集落が立地している。

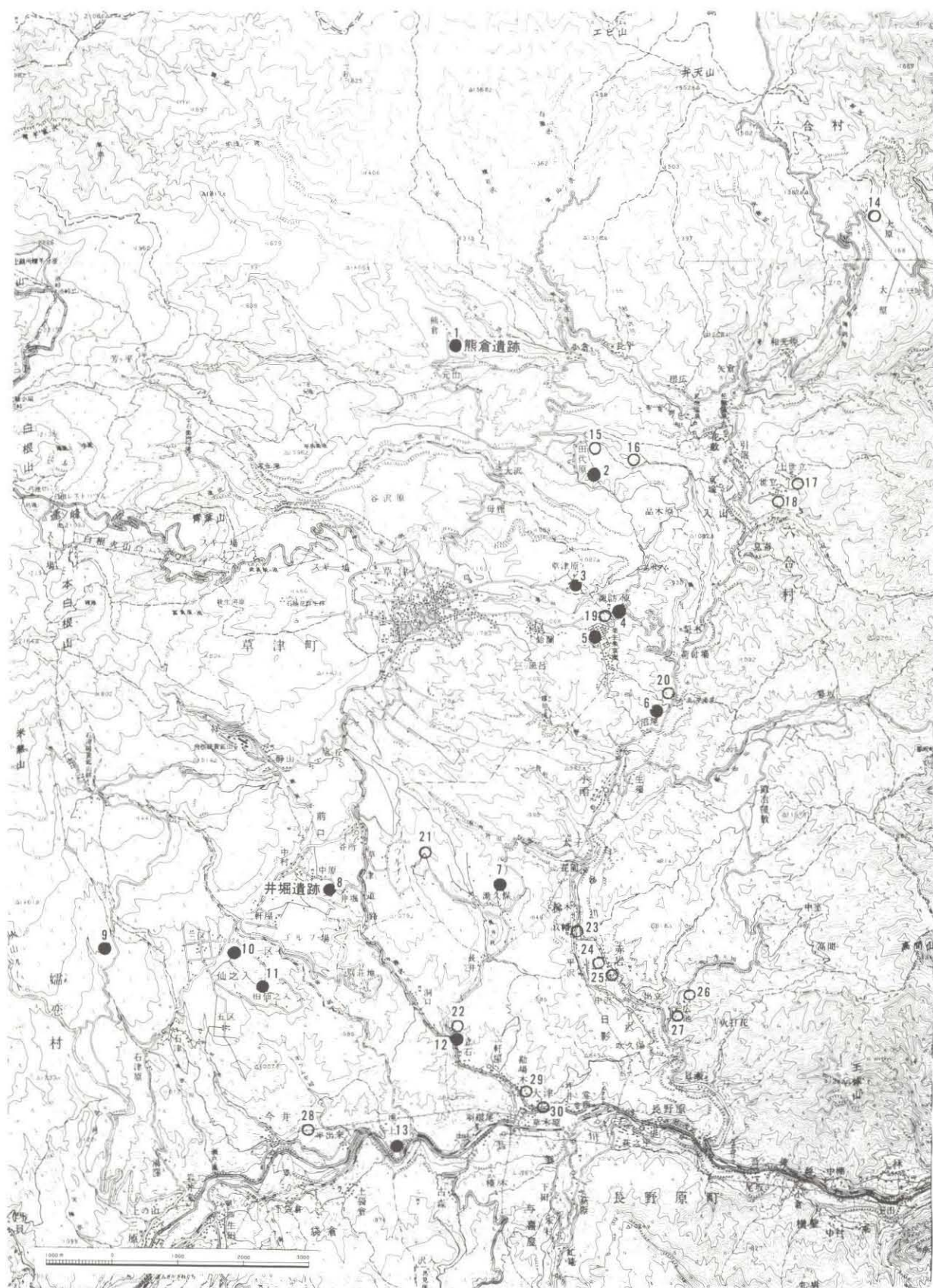


一方、縄文時代の遺跡は、山麓と谷底との両方に分布している点で、明瞭な棲み分けの区分がなかったことを物語っている。これに対して平安期の遺跡は、先述のように山麓平坦地に集中することが注目される。現在の集落は、ことごとく谷底に拠点を有しており、この点から比較すると対照的な相違をみせている。

4 山棲み集落の成立

以上の結果から、熊倉遺跡の平安時代集落は、過去からこの地で生活が営まれていたものではないことが判った。平野部の良好な沖積地を中心として水田耕作が開始されたことによって、山間部に住んでいた人々もこぞって平野部へ移行をはじめていった。すなわち、水田耕作の開始とともに、山間部は主要な生活の舞台からはずされていったのである。山間部での生活が再び開始されるのは、平安時代になってからのことになる。

山間部に再び集落が進出する時期は、平野部ではすべての水田適地が開発しつくされて、最も劣悪な条件下にある冷水・過水地帯にまで、盛んに水田耕作が進出している時期でもあった。平野部における農耕集落は、水田耕作とともに畠作もさかんに行っ



白根山麓の遺跡分布 ● 1～13平安時代 ○ 14～30縄文時代

＊能登健「熊倉遺跡の
再調査」『群馬文化』
1983, 3

根広の耕地

六合村の耕地は傾斜地の畑が多い。人口に比べて耕地は広く、
焼畑の経験者はいない。



ていた。群馬県下では、すでに4世紀代には畠作址が確認されており、6世紀や12世紀およびそれ以後の広域的な畠址の調査も行なわれている。しかし、居住域はあくまでも水田耕作を指向した形で立地している。前項で述べた平野部における集落拡大・拡散のプロセスは、あくまでも水田耕作に固執しているという点で、単に民衆の意識のみにその要因を帰することはできない。農耕社会において水田のもつ政治的側面の分析が必要になってくる。もちろん、山間部への集落進出も、このような状況下での平野部における集落動向に規制され、依拠していることは当然であろう。

山間部の集落の主要な生活の基盤は畠(畑)作農耕であった。従来、このような立地状況下の集落は、特殊な生活様式として、狩猟民、仙人、山岳信仰などにかかわるものとして考えられてきた。しかし、歴史学的、民俗学的な分析によっても、主な生産手段をこのような特殊な生業に求められる生活様式は普遍化されていない。現在の六合村でも木工が盛んに行なわれてはいるが、これが生活の中心をなし得ているわけではない。熊倉遺跡や井堀遺跡の発掘調査でも、特殊な生業を示唆する資料は得られていない。むしろ、"里。に対する"山。という、畠(畑)作を根幹とした生活様式を考えざるを得ないことになる^{*}。

群馬県の山間部には、白根山麓と同様に、縄文時代と平安時代の混合という遺跡分布を示す地域が多い。そして、これらの地域に共通する点は、いずれも里の世界から隔絶された地域にあたっている。すなわち、平野部、あるいは平野部と他の地域を結ぶルートから、さらに奥山へと入った地域である。もちろん、それらの地域

のほとんどは、現在に至っても水田耕作が不可能である点でも共通している。水田耕作が政治的圧力として進められ、しかも水田農耕を中心とした世界観が構築されている体制下で、これと相反する、このような地域への移入は、体制内の動向というより、むしろ執拗な水田開田政策をとった体制に反する動きとも考えられよう。水田耕作を放棄するということは、それだけで、体制に対する反抗でもある。

里から隔絶された、すなわち里人や、それを包括する体制の世界観の域外と考えられる地域への進出の動因をここに見たい。

5 熊倉遺跡の発掘調査

熊倉遺跡の発掘調査に先立っておこなわれた遺跡分布調査の結果から、白根山麓における平安時代の遺跡の立地が、高標高の平坦地に集中している点に注目した。これらの地点は、一見すると畠(畑)作に適した地形に思える。しかし、現在の集落はこの地点にはほとんどない。谷あいの傾斜地や谷底に立地する。

発掘調査によって、熊倉遺跡の存続期間は、土器型式にして一型式、あるいは、多くても二型式の範囲内にあることが判明した。山間部へ進出し、平坦な

「農耕適地」を選地した新住民たちは、短期間のうちに、その地点を放棄したことになる。同時におこなわれた火山灰の分布調査によって、集落の放棄は、火山災害とは無関係であることも判明している。

集落放棄についての疑問は、民俗調査によって解決の糸口を見出すことができた。この平坦地には1m前後の黒ボクが堆積している。現六合村民は、「黒ボク土」を地味のやせた土地の代名詞として使用している。これに対し、谷あいの傾斜地は小礫も多く、耕作に不向な地形をしているが、土砂流出による攪拌などによって、作物に対してはむしろ良好な土壌を有しており、「真土」として区別している。一方戦後の開拓民は、平坦な黒ボク土地帯に進出し、その地味の悪さを肥料の大量投入でおぎなっている。また、この地点は霜害地帯でもある。地形的には農耕適地であるが、地味の悪さと気象条件から、これらの平坦地は農耕には不適な土地であった。平安時代に進出した人々は、このことに気付いた時点で谷あいや谷底の真の農耕適地へ移動したと考えたい。その後は、これらの平坦地は居住域、農耕地としての土地利用は積極的には行っていない。平安時代の住居址が凹地のまま現在まで保存されていたことは、耕作などによる地形の改変がなかったことをも示している。

平野部にあって、水田農耕を基調にした生活様式を「里棲み生活様式」として、これに対する水田以外の耕作、すなわち畠（畑）作を基調にした生活様式を「山棲み生活様式」として農耕社会における二つの生活様式の抽出を試みた。この二つの生活様式は、体制の内と外にある点で象徴的な差異をみせることになる。里棲み生活様式での世界観は、里から見える範囲、すなわち里から一望できる山の稜線の内側の世界とすることができる。群馬県では、6世紀代に赤城山荒山の山腹に櫃石信仰が成立し、その後平安時代およびそれ以後には、大沼・小沼信仰、地藏信仰へと発展してゆくことになる。この間に赤城山麓は、平野部（現在の水田卓越地帯）の里棲み生活様式の拡大としての谷地田の開発に伴って、山から里山へ、そして里棲みの生活域へと地域拡大がおこなわれる。そして、このプロセスでも、山麓高標高地帯（現在の水田・畠作混交地帯）では、縄文時代以後に一担集落のとだえたところへの再進出となっていく。

一方、これら里棲み生活様式の外側である地帯には9世紀ごろになって新しい生活様式が成立する。この生活様式は、里における「山」とは異った、いわば「外界の山」（現在の畑作卓越地帯）の中での山棲み生活様式として新たな展開をはじめることになる。律令体制の崩壊に伴って出現した新しい生活様式といえよう。

農耕社会における二つの生活様式

山棲み生活様式（畑作卓越地帯） 山 （水田・畑作混交地帯） 里棲み生活様式 （水田卓越地帯）	
山間地 B	新生活様式の出現 9 C ~
山間地 A	（山岳信仰） 6 C ~
山麓・丘陵地	第二次新開集落 8 C ~ 谷地田の開発
平地 B	第一次新開集落 5 C ~ 溜井灌漑の出現
平地 A	伝統集落 1 C ~ 稲作農耕の開始